徳姫の生きた時代（短歌集）

安達　真魚

少女時代の徳姫（生成 AI にて作成）

■ 序文

いわき市内郷白水町広畑には、福島県で建造物として唯一国宝に指定されている国宝「白水阿弥陀堂」がある。平安時代後期の１１６０年、岩城の国主岩城則道（いわきのりみち）の妻徳姫（とくひめ）が、則道の死後剃髪して徳尼御前となり、菩提を弔うために願成寺（がんじょうじ）と白水阿弥陀堂を建立したとされている。同地の真言宗智山派の寺院、願成寺が所有する。

白水阿弥陀堂は昭和の発掘調査によって、池を含む浄土式庭園を伴った寺院であることが明らかになり、平安時代の東北地方南部の代表的な阿弥陀堂として、国の史跡に指定されるとともに、庭園復元事業が進められ、創建当初の姿に復元された。

阿弥陀堂の建物自体は、平泉の中尊寺金色堂に模したもので、金箔は塗られていないものの、美しい造形を見せてくれる。周りに池を配した様子は、浄土式庭園そのものであり、毛越寺のニュアンスを継承し、異次元の世界に導いてくれる。ちなみに、池越しに仏教建築物を望むことができる主な浄土式庭園には、他に平泉無量光院、宇治平等院、浄瑠璃寺、鎌

倉永福寺などがある。

この徳姫であるが、地元ではすこぶる知名度が高い。平泉から岩城に嫁いで、国宝になるような阿弥陀堂を建立したことが大きく後世の人々の心に残ったからであろう。以前、いわき市では、源義家、岩城則道、徳姫、安藤信正（磐城平藩主）など地元ゆかりの歴史上の人物に扮した芸能人がパレードする時代まつりが行われていたことがあった。そのなかで、主役は、いつも岩城則道と徳姫だ。また、地元商工会では、「徳姫ちゃま」という歴史ゆるキャラを企画して、地元振興に役立てている。

徳姫は、平安末期に生存した人であり、歴史上登場するといっても詳しいことがわかっているわけではない。女性ということもあるし、日本の歴史全体のなかで重要性が高いわけではないので、彼女の足跡は一部を除き謎が多い。一方の夫とされている岩城則道は、岩城氏の始祖と云われるが、彼の事績もほとんど不明だ。しかも、この二人が生存したと思われる年代は一世紀ほど違う。二人が夫婦であるという記述は、数多く見受けられる一方で、この年代の違いを指摘されている人も多い。

昨年（２０２２年）、「流れ星ひとつ」という曲を自作している。内容は、徳姫にちなんだものだ。もともと原作は「TOKUHIME」で、詞は、本誌１８号の～時を超えて～に掲載されている。間奏のエレクトリック・ギターのソロもうまく収まっていて、自分の、お気に入りの曲の一つだ。

詞：http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/img/kusano-18.pdf

曲：https://marukiyo.work/fifth%E3%80%8Curashima%E3%80%8D/

この曲の説明で、この姫の生まれ故郷は京都の可能性が高いと書いてしまったが、後で、これが間違いであることに気づいた。創作なので、それはそれでいいかと思ったりはしているが、これをきっかけに、自分が思っている彼女の生きた時代のイメージだけでも記述しておいた方がいいと思い、本文を書くことにした。

したがって、史実というようなレベルではなく、多くは想像を含む自分の思い描いたストーリーを記述したものであることをお断りしておく。さらに、ストーリーの展開にちなんだ短歌を自作して、短歌集という形にした。現在の言葉づかいで、かつ稚拙な内容であることをご容赦いただきたい。

なお、「石城」「岩城」「磐城」「いわき」の表記の違いについてであるが、時代や使われ方によって、さまざまな表

記がされてきたようである。本文では、明確に適切だとわかる場合以外は、「岩城」と表記した。

■ 常陸平氏

将門の乱以降、平貞盛の子孫が繁栄し、常陸一円に勢力を広げ、常陸平氏と呼ばれた。 多気権守多気致幹（むねもと）は、常陸平氏の一族として、筑波郡多気（筑波山の西麓、南麓一帯）を支配していた。現在のつくば市北条がその拠点だ。この一族は、常陸大掾職を継承する一族でもあった。

源頼義は、前九年の役に勝利し、京都への凱旋途中に、筑波のこの致幹の館に宿をとった。常陸平氏の多くは、何か軍事的な徴発があれば、源家などの配下になって動員されるが、致幹もその一人であった。宿泊の際、頼義と致幹の娘が一夜を共にした。頼義が見染めたのか、致幹が旅のなぐさみにと配慮したのであろう。この一夜の契りで生まれたのが徳姫である。河内源氏の嫡流と常陸平氏一族の血が流れた貴種といわれる女子の誕生だ。源義家や源義光などとは異母兄弟に当たることになる。前九年の役の終結が１０６２年９月で、その年のうちに京に向かっているので、徳姫の生まれ年は、１０６３年の可能性が高い。

致幹にとっては、頼義の娘であるといっても、かわいい孫娘であり、大切に育てられたに違いない。京生まれではないが、長じて、容姿端麗、気品のある美人であったことは、容易に想像できる。また、常陸大掾職を継承する大豪族一族なので、小さい頃からずっと何不自由のないお姫様であったであろう。しかし、この誕生は、少なくとも頼義在世中は、秘されていたようだ 。

玉のよう　尊き方の　落とし種
多気の里に　春が来たれり

あどけなく　笑顔振りまく　純真さ
季節の中に　輝くばかり

夕やけに　見上げる先は　西の空
何想うのか　小さな心

■ 夫婦養子

徳姫が幼少から適齢期にかけて、陸奥の国はどのような情勢であったろうか。

前九年の役の後、頼義を助け、戦の勝利に最も貢献した清原武則が鎮守府将軍に任じられ、実質的な陸奥の支配者となっていた。鎮守府将軍は、奈良時代から平安時代にかけて陸奥国に置かれた軍政府である鎮守府の長官である。鎮守府は、陸奥国府のある多賀城から離れた胆沢に置かれていた。鎮守府将軍は陸奥国と出羽国の両国に駐屯する兵士を指揮していた。武則亡き後、その子武貞が跡を継いだが、その武貞も亡くなった。武貞には、真衡、清衡、家衡の3人の男子がおり、年長の真衡が清原を継いだ。しかし、この3人はそれぞれ複雑な事情を持っていた。真衡は正当な世継ぎであるのだが、多くの側室がいても子供に恵まれていなかった。家衡は、3人のなかで一番若いが、母は、前九年の役で敵であった安倍頼時の娘で、藤原経清の妻であった有加一乃末陪（ありかいちのまえ）を武貞が妻とし、生んだ子あった。清衡は、藤原経清と有加一乃末陪の子であり、武貞にとっては継子である。家衡とは、異父兄弟であり、家衡より年長である。

真衡に世継ぎがいないとなれば、弟を養子にして、後継者とするのが普通であろうが、この弟二人を後継者とすることはなかった。かつて敵であった者を母に持つ弟たちには継がせたくなかったのだろうか、とてつもないことを考えた。海道平氏の海道小太郎・成衡を養子とし、筑波多気の常陸平氏の多気致幹の孫娘・徳姫を嫁がせ、夫婦養子として迎えることを画策したのだ。真衡にとっては、この平氏一族の子弟と常陸平氏でも河内源氏の嫡流の血を受け継ぐ徳姫を迎えることによって、清原の家格を高めることも目指していたといわれている。

もともと清原氏は、海道平氏一族とは縁戚関係が深いといわれている。清原氏も海道平氏も出羽守であった平安忠の子孫である。清原武則と岩城則道は兄弟であった可能性も高い。真衡が海道平氏の成衡を養子とするのは、近しい縁戚からの養子縁組なので、さほど不自然さはない。しかし、一族には多くの反発があった。最も不満の大きかったのは、武貞の実子であった家衡であろう。清衡については、父がかつての敵方で、清原の直接の血も受けていないので、家衡より年長であっても、継ぎ養子となる資格は全くなかった。

多くの反対がありながら、この縁組は進められることにな

った。多気致幹は、真衡からの申し入れを受け、都にいる源義家の承諾をとった上で、この縁組を受諾した。これによって、多気では、ちょうど適齢期になっていた徳姫の婚儀の準備が進められた。

１０８３年早春、徳姫は主だった親族、従者とともに、陸奥国胆沢（岩手県奥州市）の地へ向かった。実際には、胆沢から近くの、真衡の拠点であった白鳥の館（たて）になる。筑波から胆沢への行程は、浜街道を利用したとすれば、筑波、石岡、岩城、多賀城、胆沢の可能性が高い。途中、成衡との対面を果たしていたかもしれない。海道平氏も常陸平氏の流れを汲んでいたといわれているので、成衡と徳姫は遠い親戚にあたる。

つくばやま　旅の始まり　ヤマボウシ
胆沢の空に　無事を祈る

峠越え　まだ見ぬ君へ　送りたい
耳を澄ませて　聞く山響き

旅の果て　胆沢の城は　田村麻呂

いにしえからの　鎮守の証し
かの君の　直垂姿　似合えども
確信できぬ　我がこころあり

呼ぶ声も　届かないほど　息絶えて
どこまで広い　胆沢の空は

■ 後三年の役

成衡と徳姫の婚儀は、武貞の葬儀がとり行われた後、日を置かないで行われた。都など遠方の客の便宜を図ったもので、二つの儀式をまとめて片づけてしまうのが狙いだ。後三年の役の発端は、この婚儀でのちょっとした事件であった。

真衡の義理の叔父にあたる吉彦秀武が祝いに訪れていた。祝いの砂金を盆に持って頭上に捧げ、真衡の前にやってきたが、真衡は囲碁に夢中になって無視していた。これに秀武は大いに怒り、砂金を庭にぶちまけて、出羽に帰ってしまった。

真衡は、この秀武の行為を許せず、直ちに秀武討伐の軍を起こした。一方で、秀武は、家衡と清衡に対して、真衡を討伐することを促した。

真衡が出羽に向かって出陣したことを見計らって、家衡と清衡は、少ない兵力ながら真衡の館を襲撃した。家衡は、真衡の館に向かう途中、白鳥村を焼き払った。清衡は真衡の館にいた成衡と徳姫の夫婦を清衡の江刺の館に連れ去り、人質とした。これを知った真衡は、すぐに軍を引き返した。家衡と清衡は、決戦を避けて、それぞれの本拠地に戻ったため、真衡は戦わずにして、家衡と清衡を退けたことになり、再び、秀武討伐の準備を進めることになった。

秋になって、源義家は陸奥守として、国府の多賀城に赴任してきた。真衡は、多賀城にて義家を大いに歓待した。国府が介入して、自分の味方になることを期待した。その後、真衡は館の備えを十分にした上で、再び出羽に出撃した。家衡と清衡は、好機とみて、再び真衡の館を攻撃する準備を整えた。しかし、出羽に向かって進軍していた真衡は、病のために急死してしまう。義家の手の者に暗殺されたという説もある。事態収拾のため義家は、国府軍を率いて胆沢に陣取った。家衡と清衡は、これに対抗するため国府軍に戦いをしかけたが、敗退し、降伏した。このとき、人質であった成衡と徳姫の夫婦は、義家のもとに引き取られた。

真衡の死後、義家は、真衡の所領であった奥6郡のうち、南の3郡を清衡に、北の3郡を家衡に分与する裁定を、朝廷の名のもとに下した。さらに、白鳥村を焼き払った家衡に対しては、年貢倍増の罪を加えた。南の3郡の方が北の3郡より豊かな土地であったことに加え、年貢の収納についても清衡がとりまとめて行うことになり、明らかに清衡に重きをおいた処分であった。

この裁定後、しばらくは平穏な日が続いた。しかし、家衡は処分に対する不満と清衡に対する恨みを持ち続け、復讐する機会を待っていた。

義家のもとに引き取られた成衡と徳姫は、一旦、清衡の江刺の館に戻された。二人にとっては、真衡の死後、清原氏として相続すべきものもなく、帰るべき館もなくなったため、清衡の世話のもとで暮らし続けることになった。清衡としても、義家の妹夫婦をおろそかに扱うことはできず、家族同様、丁寧に扱われた。この頃から義家と清衡との間には、一定の

信頼関係が生まれていた。

その後、機会を覗っていた家衡は、味方の兵を計画的に集め、清衡が江刺の館を留守にするときを狙って、江刺の館を襲撃した。館にいた妻子を人質にして、戻ってきた清衡を亡きものにしようと画策した。しかし、これは成功せず、清衡の妻子は無残にも全員殺されてしまった。清衡が死ねば、清衡の遺領はすべて自分のものになるという家衡の計画は失敗に終わった。このとき、同じ館にいた成衡、徳姫は無事であった。家衡にとっては、この夫婦は不要な者たちであったが、ここで殺してしまえば、徳姫の兄である陸奥守義家の限りない反感を買うことは明らかであり、これは避けなければならなかった。

家衡は、襲撃の後、本拠地の沼柵（秋田県横手市雄物川町）に立てこもった。義家は、清衡の訴えを受け、自ら下した裁定に反逆して清衡を殺そうとした家衡を討伐すべく、清衡とともに沼柵に向かった。しかし、準備不足と季節が冬であったため、義家・清衡の連合軍は、敗退した。

年が明けて、１０８７年、家衡は叔父の清原武衡の誘いにのり、武衡の本拠地である、より堅固な金沢柵（秋田県横手市金沢地区）に移り、立てこもった。義家・清衡の連合軍は、義家の弟である義光の都からの来援もあり、数万の兵を動員して金沢柵を包囲した。金沢柵は激しい攻撃にも抵抗したが、吉彦秀武の献策による兵糧攻めによって、陥落した。家衡は逃走しようとして討たれ、武衡は捕らえられて斬られた。このときの敗者に対する処遇は過酷なもので、ほとんどの清原軍の兵や妻子が虐殺された。ここで、この合戦は終了し、前九年の役以降、陸奥の支配者であった清原氏は滅亡した。

後三年の役に勝利した義家だが、朝廷からはこの戦いが清原氏の私闘とされ、何の恩賞も受けることがなかった。配下として戦ってくれた板東をはじめとする多くの将士たちには、私財を投じて報いなければならなかった。ただ、このことが、子孫である義朝、頼朝らが成しえた坂東での三河源氏を中心とする武士団形成の大きな要因になった。

義家は、八幡太郎の通称で知られる武将である。前九年の役、後三年の役における働きなど数多くの伝承や伝説が残されている。

義家が、後三年の役の終結後、京に戻る途中、勿来の関で詠んだ有名な和歌がある。

吹く風を　なこその関と　思へども
　　道もせに散る　山桜かな

勿来の関は陸奥への入口の関にあたる。「なこそ」は来るなという意味であるが、陸奥守の任を解かれて陸奥を去っていく義家にとっては、ずっと思い描いていた陸奥の国への思いとの決別であったのだろう。その後の義家の人生は、朝廷内での立場も芳しくなく、一族内での紛争などもあって、必ずしも順調であったとはいえない。ただ、子孫である源頼朝が鎌倉幕府を開くまでの過程などにおいて、義家の陸奥での働きが大きな影響を及ぼしているのは前述したとおりだ。

いく年も　慕い続けた　異母兄の
**　溢れた笑顔に　父を重ねる**

駆け引きの　道具になりし　江刺の地
**　暮らしそつなし　思いのままに**

母子とも　炎のなかに　消え去りぬ
**　南無阿弥陀仏　切なさ誘う**

■ 江刺から平泉へ

後三年の役の後、清衡も何の恩賞もなく、官位を受けることもなかった。ただ、主だった清原氏の統率者は亡くなった。成衡にしても真衡の死後の清原氏を継承するのは任が重すぎた。必然的に、清衡は、清原氏、安倍氏の生き残りとして、また実力者として、奥州全体を束ねる統治者の地位を築いていくことになった。

成衡と徳姫については、もともと真衡の養子であるので、清衡にとっては義理の甥と姪である。改めて家族の一員に加えたであろう。妻子が殺されてから間もない時期だけに、同じ館で暮らしている義理の家族として歓迎すべきことであった。また、この扱いは、都の義家に対しての配慮でもあったと考えられる。なお、成衡については、後三年の役の最中に討ち死にした説や下野国塩谷郡で、義家の勘気を被り討伐された説がある。

成衡と徳姫は、後三年の役の後も江刺の館に居住した。奥州は大きな戦はなく、しばらくは平和な時代が到来した。改めて、平穏な新婚生活を送っていたかもしれない。一方で、清衡とその配下は、新たな統治の枠組みを構築するため、繁

忙を極めたことであろう。成衡も配下の一人として、それらの執務にあたっていたかもしれない。

成衡は、岩城へ戻れば、岩城氏の当主になるべき人であり、清衡が奥州をまとめあげていくのにも必要な人材であった。清衡にとって都合のよかったのは、岩城の所領を成衡に安堵し、平泉の旗下として陸奥の浜街道最南部の岩城を統治できることであった。当時、源義光は、岩城の菊多郡を拠点に常陸の北部で勢力を拡大しつつあった。後の佐竹氏である。奥州側の清衡にとっても、この勢力と良好な関係を築いていく必要があり、岩城氏にとっても同様であった。

成衡は、機を見て、清衡の負託を受け、岩城の地に赴いていった。成衡との間にはすでに子供がいた可能性も高く、岩城で妻子を迎え入れる準備もしなければなかった。成衡は、その後も清衡のもとにいた徳姫と岩城の間を何度か往復していた可能性が高い。

清衡は、江刺（江刺郡豊田館）から平泉に宿館を移した。この平泉進出は、陸奥北部を開拓し、蝦夷との境界を津軽海峡まで北進させるという国策と深く関係していたと云われる。また平泉は、水陸交通の要衝の地であり、すでに任官していた押領使として、奥羽両国を押領しようとする意思表明であったとされる。実際に移ったのは、１０９９～１１０４年頃で、そのあと、中尊寺の造営が着手された。

清水の　湧きあがる里　平泉
極楽浄土　世は平らかに

世はまさに　光輝く　金色堂
思いのままに　時代は移り

都から　遠く離れた　みちのくの
仏の世界　四方八方に

白鹿の　お告げ伝えし　毛越寺
華麗なる池　延年の舞

野に響く　新たな都邑（とゆう）の　槌音に
遠く離れた　我が君のこと

■ いわき平

徳姫が岩城に向かったのは、すでに４０歳近くのことで、すでに中尊寺の造営も着手されていた。何人かの子供たちを従えての旅立ちであった。徳姫にとっては、このような旅立ちは、多気の里から胆沢に向かった婚儀のとき以来である。清衡にとっても、長年いっしょに暮らしてきた徳姫やその子供たちとの別れは、大いに寂しいものがあったであろう。すでに徳姫は清衡の養女であり、改めて岩城への嫁入りであった。

平泉から岩城へは、女、子供中心の旅であるので、１０日あまり要した。出迎えた岩城氏一族や岩城の人々からすれば、徳姫は、年も若くもなく子供もいるのだが、高貴で気品のある、平泉からの花嫁に見えた。

常磐線いわき駅（旧平駅）のすぐ北側は高台のへりになっていて、江戸時代の初め、鳥居忠政が築城した磐城平城の城址がある。そこにはもともと飯野八幡宮があったが、築城時に遷宮し、現在は数百ｍほど西の八幡小路にある。岩城氏は、岩城四十八館と呼ばれるように、周辺各所に一族の拠点を置いているが、この磐城平城があった場所こそ、もともとの本拠地であった。徳姫の時代もこの場所だったと思われる。いわゆる「いわき平」と呼ばれる夏井川とその支流流域の、平坦な低地が眺望できる場所である。

群馬県生まれの明治、大正時代の詩人、山村暮鳥（ぼちょう）の有名な詩「雲」がある。徳姫の時代から変わらない原風景が描写されている。

おうい雲よ
ゆうゆうと
馬鹿にのんきそうじゃないか
どこまでゆくんだ
ずつと磐城平の方までゆくんか

飯野八幡宮の社伝には、「康平６年（１０６３）源頼義が奥州合戦（前九年の役）出征の時、京都石清水八幡宮を必勝祈願のため勧請したという。（中略）室町時代には神領の減少が見られたが、菊田・磐崎・磐城・楢葉・標葉の岩城五郡の総社として、岩城氏を始め一般庶民からも厚い信仰を受けた。」と記されている。かつて、徳姫の父である頼義が、この地を訪れ、必勝祈願をしたというのも何かの縁であろう。

聞きたくて　声主のもと　近づくも
**　姿は見えず　夢の彼方に**

松が浦　我が思う程に　波高く
**　今も忘れじ　潮騒愛し**

晩秋の　浜海道は　いつになく
**　脚どり軽く　紅葉色づく**

岩城へは　いづくの道ぞ　かもめさえ
**　なぞる遥かな　午のあたりへ**

夏井川　渡れば平　冬支度
**　岩城の里は　賑わいのなか**

■ 成衡の死

このころ、陸奥菊田荘（いわき市南部）を支配下においた源義光は、常陸の奥七郡へも領地を広げていた。１１０６年には、常陸大掾上総介平重幹と組んで、下野国源義国（義家三男、足利氏、新田氏の祖）と戦っている。常陸合戦である。成衡も、清衡との関係もあり、義光の要請で、岩城から参戦していたのではないだろうか。このとき、成衡は下野国塩谷郡氏家・風見館で討ち死にしてしまった。義家の勘気を被ったというのはこのときかもしれない。５１歳で死亡したという説もある。この悲報は、徳姫や子供たちにはすぐにもたらされたことであろう。

　海道小太郎・成衡は、後三年の役の発端になった人物として、関連する文書には、必ず登場する人物であるが、彼の足跡はほとんどわかっていない。ただ、成衡は、５子の親として、岩城氏の系図上（系図上は隆行と記されている）に残されている。死後それぞれに領地が分与されていくことになるが、多くの子を授かったことは、その後の岩城氏の繁栄の礎を築いた人物であったともいえる。

　領地分与といっても、主導的な立場にあったのは、徳姫以外にいなかった。平泉の威光も大きく、子供の領分を決めていくのは自分しかいないと思ったはずだ。第一子隆祐は楢葉郡を、第二子隆衡は岩城郡を、第三子隆久は岩崎郡を、第四

子隆義は標葉郡を、第五子隆行は行方郡を所領とした。宗家を継いだのは第二子隆衡であった。

徳姫がいる限り、領地分与した子供たちの統制も充分とれていた。さらに、徳姫は、新たな田園の開拓にも尽力していた。平泉の後見もあり、徳姫在世中は、この地域の政治の中心は、徳姫にあったともいえる。また、皮肉にも、成衡の死後の何十年かは、岩城氏が最も繁栄した時代だった。

戦地への　道のり遠く　見送りて
御守り一つ　無事を祈る

胸騒ぎ　知らせ悲しく　立ちすくむ
こころ乱れし　暗闇のなか

■ 平泉への憧憬

徳姫が岩城の地に移り住んで以降も、平泉の建設は少しずつ着実に進んでいた。中尊寺も完成し、基衡の時代になり、観自在王院の造営も始まっていた。徳姫のもとへも、ことあるごとに、それらの様子が知らされていたはずだ。平泉がどのように発展しているのか、有様を目の中に浮かべていく日々であった。そして、岩城の地も平泉になぞらえて、見ていたように思う。

高台にあった岩城の館の周囲は、東に夏井川、北に夏井川の支流の好間川が流れ、南には、やはり夏井川の支流の新川が流れている。これらの川は、すべて阿武隈山地を水源としている。とくに南側の新川流域は、平坦な田園地域が広がっていた。「いわき平」と呼ぶにふさわしいものであった。

眼下の新川を川上へしばらくたどって行けば、阿武隈山地のふもとにたどり着く。そのふもとの近くに、川の出口の東側を除く三方が山で囲まれ、ぽっかりと空いた平坦地がある。落ち着きのある、居心地の良さそうな場所だ。現在の地名では、いわき市内郷白水町広畑である。この土地を平泉の泉を分解して白水と名付けたといういわれがある。すなわち、新川のここから東側の平坦地を「平」、西側を「白水」と呼ぶようにしたということだ。白水の名は、阿武隈山地からの水が清水であったことも由来の一つとされている。ちなみに、「平」というのは、平氏の平や、平坦地の平という説も有力

である。

徳姫は、岩城に住んで以来、館のある平から白水まで何度も訪れていたことであろう。平から白水までは、子供の足でも容易に日帰りできる距離である。この新川をたどる道は、周囲が田園地帯であり、民の暮らしもよく観察できていただろうと思う。平泉では、奥州の都づくりも最終段階になっていたこともあり、この平から白水まで往来を通して、この白水の地にも、平泉に模した建造物を造営しよう決意したに違いない。

新川の　川の流れに　逆らいて
明日へ架ける　尼子の御橋

常盤路の　奥に入山　山遊び
大市姫命（おいちひめのみこと）　心やすらか

■ 白水阿弥陀堂

新川も、夏井川も、人々に大きな恵みを与えてくれている川である。しかし、多雨期には甚大な水害をもたらす危険な川でもあった。いわき市平といわき市内郷の境界付近に、県道２０号線（旧国道６号）がこの新川を横切っている箇所がある。当時、この近辺では新川が一旦氾濫すると海のようになり、平と内郷間の往来ができなくなっていた。この難を救うために、徳姫が資金を出して、架橋させた。夫の死後、徳姫は剃髪して徳尼御前と呼ばれていたので、完成した橋は、「尼子橋」と呼ばれた。現在の尼子橋は、この尼子橋の上流約２５０ｍに位置する県道２０号（旧国道６号）に架けられている。旧来の尼子橋も昭和５８年に架け替えられ、白水阿弥陀堂の浄土式庭園の池に架けられた朱塗りの橋と同じ形状となっている。

徳姫は、夫の菩提を弔うため、白水に阿弥陀堂を造営することを発願した。菩提を弔う対象は、夫のみでなく、岩城氏一族の代々の霊に対してであると同時に、自分がこれまで生きてきた間に亡くした全ての霊に対してでもあろう。資金供

出についても、夫の菩提だけの名目では、一族周辺の理解を得るのは難しかった。そこで、岩城氏始祖の則道の霊を筆頭に祀ることにしたため、則道と弔う側の筆頭である徳姫が夫婦であるかのように誤解され、後世に伝わってしまったのではないかと推測される。

造営するものは、菩提を弔うため寺と、仏教の浄土思想に基づき、阿弥陀如来が住まう極楽浄土を具現化した広大な浄土庭園と阿弥陀堂である。これらの様式は、平泉の影響を色濃く受けたものというより、模倣したものといえる。金箔は施されていないものの、堂の形状は、平泉金色堂とそっくりだ。

しかし、徳姫のその願いはすぐに実現できるものではない。まず、資金の調達が最重要課題であったはずだ。その裏付けを基にして、計画して実行する人材と、実際に金色堂を造営した技術者を、平泉から呼び寄せる必要があった。また、木材などの建築材料も調達しなければいけないし、仏像を製作する仏師や壁に極楽浄土を描くための絵師などを集めるのも大変であったに違いない。残念ながら、現在では当時の壁画などはほぼ失われている。寺（現在、真言宗智山派菩提山願成寺）を含めて、完成したのは、１１６０年と云われる。

徳姫は、このとき９０歳半ばになっていた。当時としては、相当に長生きした人であった。

白水阿弥陀堂の造営資金を、地方の豪族が単独で捻出することは大変なことであった。徳姫には、企画力に加えて、財力とそれを執行していく力があった。地元の郷土史では、徳姫を「当時のいわきの文化に功績を残した偉大な人物である」と賞賛している。しかし、文化面のみでなく、女性ながら政治、経済、その他社会事業全般に至るまで、残した功績は大きく、それらを見直す必要があるだろう。

徳姫の享年は不明だ。徳姫の死後、奥州も時代は次第に移り変わっていった。義家の子孫の頼朝が伊豆で挙兵したのは１１８０年で、その後鎌倉幕府を開いている。奥州藤原氏も泰衡の時代になり、１１８９年に滅亡した。

阿武隈の　南の果ての　湯の岳の
その麓（ふもと）なり　白水の里

黄金色　新川沿いに　たどり行く
秋色染まる　阿弥陀堂

新緑の　山は萌えても　藤の花
薄紫の　匂いを誘う

池越しに　見ゆるお堂は　我が君の
在りし日姿　想い起こさる

お御堂の　ほのかな灯り　誘われて
輝き放つ　柄杓(ひしゃく)星見る

■　結び

２０２３年９月８日から９日にかけて、台風１３号はこの地区に未曽有の水害をもたらした。新川の支流を含めた、主に上流域で多くの浸水箇所が発生した。白水阿弥陀堂も泥水の上に堂の上部が見えるくらいになるまで、域内全体が水没した。堂内に安置されている重要文化財の仏像には被害がなかったことと、比較的短期間で拝観再開できたのが、不幸中の幸いであった。

阿弥陀堂の入口から願成寺に向かって歩くと、白水常盤神社の鳥居が見える。鳥居をくぐって、やや急な階段を上ると、白水常盤神社がある。この神社は、大市姫命（おいちひめのみこと）である徳姫（徳尼）を祭神とした神社で、当初阿弥陀堂境内東側に祀られていたが、明治維新の神仏分離令により現在の場所に移設されている。高肉彫の鉄製懸仏聖観音像は、鎌倉時代後期に作られたとされている。のぼり旗はピンク地で、恋愛成就、夫婦円満、慈愛の杜、白水常磐神社と書かれている。

知人の家でこの神社を管理しているので、その存在を知っていたし、参拝した記憶もある。しかし、恥ずかしいことに、この文章を書こうとするまで、徳姫が祭神だという認識がなかった。神社の由緒書きも見ていると思うので、真剣に見ていなかったか、忘れていた、というのが正直なところだ。

この神社の存在やいくつかの伝説でもわかるように、徳姫の遺徳は、後世にまで伝えられている。彼女の慈悲深さは、彼女の生きた時代を通して、自然と醸成されたものであろう。

徳姫の生きた平安末期の東国や奥州では、貴族や在地領主の武士などの勢力争いが続いていた。本人も何度か争いの中

で、手痛く翻弄された。これらの時代背景を乗り越えて、阿弥陀堂を造営することによって、極楽浄土を具現化した。彼女が希求したのは、互いに憎しみ合うことではなく、愛が溢れ、人々が豊かに安心して暮らせる平和な世界の到来ではないだろうか。すべての人が共有すべき願いである。

そよ風に　萌える緑は　まぶしくて
**　たゆまぬ命　今惜しみなく**

生き生きて　昔の友の　声遠く
**　岩城の里は　今日も晴れやか**

（抜粋）
－文　芸－　草の丘　第２５号
２０２３年１２月　印旛文学の会
URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/